

『本日は、お日柄もよく』

原田マハ 著 徳間文庫 713 円 (税込)

言葉の力を信じて

会員 田上 博也 (74 期)



弁護士の仕事が本格化してからというもの、目の前の業務に追われる日々が続き、じっくりと本を読む余裕はすっかり失われていた。そんな中、同期の弁護士から強く勧められた一冊が、この原田マハの『本日は、お日柄もよく』だった。本書は、スピーチライターという少し珍しい職業を題材に、言葉の持つ力と、それを伝える技術、さらには人を動かす誠意について、具体的なスピーチの場面を交えながら深く描かれた物語である。

物語の主人公は、ごく普通のOLである。冒頭、友人の結婚式で退屈なスピーチに辟易していたところ、偶然耳にした伝説のスピーチライター・久遠久美による祝辞に心を打たれたことで、彼女の人生が大きく動き出すことになる。彼女は、久遠の事務所でスピーチの技術と心構えを学び、やがては社内のプレゼンテーションなどで、言葉を武器に活躍していくようになる。

さらに、スピーチは単に祝辞や社内発表にとどまらず、やがて政治の場にまで広がっていく。主人公の成長とともに物語のスケールも拡大していき、読んでいて飽きさせることがない。また、主人公を取り巻く職場、ライバルとのやりとり、家族との関わり、恋愛模様なども丁寧に描かれており、単なるスピーチ指南書としてではなく、しっかりと読み応えのある小説作品として成立している。

本書は、ただ主人公が成長し、成功を収めていく様子を描いた物語ではなく、なぜ言葉が人の心を動かすのか、良いスピーチとは何かといった問いに対し、数々のエピソードを通して丁寧に答えを示している。なかでも心に残ったのは「聞き手を思いやる姿勢の大切さ」である。言葉は話し手のものであると同時に、聞き手の心に届いて初めて意味を持つという視点が随所に貫かれており、弁護士として日々言葉を扱う立場にある自分にとっては、深く共感し、学びの多い内容だった。

読後、改めて痛感したのは、「言葉の力」の大きさである。日々の業務においても、説得や説明、交渉において「どう伝えるか」が極めて重要であり、内容の正確性だけでなく、相手の心に届くように語る工夫が求められる。法律という論理の世界に身を置いているにもかかわらず、その論理を支えるのはやはり「言葉」なのだとは再認識した。

実務から少し離れた読書時間ではあったが、むしろ実務の本質に迫る気づきを数多く得られた。原田マハの『本日は、お日柄もよく』は、言葉を生業とするすべての人に手に取ってほしい、心に残る一冊であった。